

入口出口

有森信二

黒揚羽が
どこからともなく現れ
二度 三度旋回する

執拗な口撃にかまけ
崩れ落ち
零れ落ち
出口という言葉が
もうまるで
拾えそうもないとき

黒揚羽が
目の前で乱れ舞う

俺は俺だ
お前はお前だと
言い募るとき

黒揚羽が
一際羽音高く空を掻く

胸塞がれ
心穿たれる
嘲笑と愚弄の
口惜しさと痛み
俺とお前が
悶え忍んでいるとき

黒揚羽が
颯々と舞い上がる

言いがかりともいうべき
無理難題ともいうべき
ねじ込み話で
入口への気持を失わせ

俺は
お前を穿ちたくなどないのだ
お前も
俺を穿ちたくなどない筈だ

晴れない気持の目の先を
今もまた

黒揚羽が二羽 三羽
漆黒の羽を掻き
絡ませ旋回する

凍る

星が凍る

オリオンが野営のテントを張る

シリウスが氷柱に埋もれる

アルデバランが襟元を掻き合わせる

アンドロメダが嚏を連発する

古の都の礎石に雪が降り積む

葉を篩い落とした楓の枝で雪が撓む

メジロが椿の枝を往来する

音けたて

風が原っぱを吹き抜ける

大地を顫わす声が荒い

傷んだ心が仮借なく打たれる

お前の心が卑屈なんだよと

ところ構わず公言してはばからない

屋根から雪が転がり落ちる

氷柱が真っ直ぐに落ち

空に刺さる

白鷺が雪積む川に立つ

首竦め

鴨の群れが川面に蹲る

柳の根元で 稚魚が目玉を突つき合う

桜の枝がかじかんでいる

梅の蕾が一つ二つ

盛り上がってきた

山茶花の花片が 風に千切れる

路地に落ち葉が舞い踊る

激しい喘鳴に噎び

北風が家並みを巡る

雲が飛びゆく

唸るのは吹雪か

電線か

稲光が音もなく

ゲレンデに

自在なシュプールを描く

オリオンが

シリウスが

アルデバランが

アンドロメダが

今夜も もう一丁と

東西の支度部屋に

応々とやってきた

時間

時間という
やつを見たことがあるかい

あるんだよ

たまたま引き出しを開けたとき

いたんだ

時間が

時間だよ

慌てて

僕の手指を引つ掻き分け

消えちまった

秒速三十万キロだって

いやあ

引き出しに

尻を挟まれ

目を白黒させていたから
秒速一ミリ
もなかったかしらん

透明だって

なに言ってる

紅殻色だよ

群青色にもなるらしいし

ブラックホールに居を構えた

やつもいるらしく

逆さにぶら下がっているしか

ないんだと

宙ぶらりんにだよ

年がら年中

時間てやつ

実に

いたるところに

いるらしく

父の臨終のときにも

派手に欠伸などしていやがった
そいつも

因業なやつに違いない

ひねた質でさ

多分

海八景

海の宴

松風蕭蕭として宴更けゆく
白装束の女官たちが舞い
血染めの草叢は今蘇り
葛の根元に蟋蟀は蘇り
謡はみずみずしい憂いに満ち
陣所に近く月の光は清冽に流れ
公達が手になる笛の音は
遙かに遠い潮騒とひとつに結び
薄紅さす頬の影青く
玻璃の行方を月光にたずねる
芦の辺の風は甘い匂いに満ち
葛の根元に蟋蟀は蘇り
陣所に近く月の光は清冽に流れ

海鳴り

ああ 今日も聞こえるね
遠いわ きつとずつと昔の海鳴りだわ
ずつとずつとね
わたしたちが生まれるより
そう ずつとずつと昔
眠たくなるほどの 遠い昔
はるかな沖合で
大きな波が崩れて
青い月が ぼっかり出て
ああ 海鳴りが聞こえるね
ずつとずつと 途方もない昔の海鳴りがね

海淵

時をいっぱいのにのみ
億年の眠りを食べる

海猛り

地がおどり
海が走り
海猛り
地が戦き
雲が激しく流れ
蒼い星々が夥しく流れ

春の海

寄せる波の音
返す波の音に
身を委ねているうちに
眠り込んでしまったことがある
寄せる波の音
返す波の音に
身を委ねているうちに
遙かな思いに涙したことがある

岬

海は白く淡い
風とサヨナラをいって
小さな指を
ポツンと立てる

凧

しあわせよ あんまりはやくくるな
しあわせよ あわてるな
しあわせよ かたつむりにのって
あくびしながら やってこい

深海

一隻、二隻、五隻

マストに大きな風を受け

岬の鼻を強引に突つ切ろうとした勢いのままで
船が眠っている

船室には大急ぎで舵を切ろうと

屈強な太い腕を伸ばした男がパイプの煙を燻らし

甲板には帆の傾きを直そうと

半身裸の男たちが必死に綱にしがみついている

晩餐会の途中でふいに停電したものだから

技師たちが発電機の前で懐中電灯を照らし

怪訝そうな表情で確かめている

貴婦人達は あら、憎い演出ですわね

と華やかにステップを踏みシャンパンを傾け合う

少し離れた船では海賊の頭領が

重てえぞ ぶんどり過ぎたかな

と満更でもない笑いをあげ

手下たちはもう前後不覚にべろべろに酔っている

かなり離れた船では

もはや船が船の形を呈してなく

男たちのたいていが頭と胴は離れ

ひらひら彷徨う己の魂魄を必死につなぎ止めようと

血を吐く思いで

千切れた片手を 指を 懸命に藻掻き伸ばしている

船の周囲には

奇天烈なものたちの死骸が層をなし

死骸の生む瓦斯のなかから蛇の形をした魚や

目玉を持たない魚たちがくねり出で

マグマに焼かれた水が激しい勢いで吹き上げられ

異様に高く伸びたウミユリや

シーラカンスは

厚化粧に レゲエダンスに余念がない